

---

# **大事なことはすべて失恋から学んだ**

坂上文隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大事なことはすべて失恋から学んだ

### 【Zコード】

Z5839Y

### 【作者名】

坂上文隆

### 【あらすじ】

そのとき僕は失意のどん底にいた。あの日以来洋子が電話に出てくれない。本当に終わってしまったのか。僕たちは運命の人ではなかつたのか。洋子のことを強く思ったそのとき、携帯が鳴った。「自分に失恋を乗り越える方法を教えたる!」。彼女は天使のテン。僕がなぜ失恋したのか、そして恋愛する意味についてテンは説き、その日から失恋との壮絶な闘いが始まった。

## 第1話 幸せな人たちの共通点

十一月二十九日、この日に永江公園に来たのは三度目だった。どうしても今日来なければいけないような気がした。しかし来てみたはいいもののここで何をしたいのか、答えはいまだに見つからない。こうして一時間以上ベンチに座つて目の前の光景を眺めているだけだった。

そこにはジョギングで汗を流している人やレジャーシートを敷いて寝そべっているカップルがいる。親子でキャッチボールをしていたり、兄弟で追いかけっこをしている姿があれば、少し離れたところでは老夫婦が仲睦まじく並んでベンチに腰掛けている。

老若男女を問わずここにいるすべての人があい想いに過ごしているように見えた。幸せと呼べる光景があるとすれば、目の前に広がるこの世界を言うのかもしない。なぜならこれだけの人が集まっているのにみんな楽しそうで顔には笑顔があり、生気に溢れている。そして誰一人としていがみ合っている人がいないのだ。

翻つて日常生活を見ればどうだろう。平日の自分の姿を思い浮かべた。朝の満員電車然り、仕事上の様々なトラブル然り、ストレスに満ちた毎日である。そう思うのは僕だけではないはずだ。同じ人間同士、どうしてこうも違うのか。どこで違つてしまつたのだろう。

答えは「歩く速度にあり」。そう仮説を立ててみた。ジョギングをしている人を見てそう思つた。彼は何も全力で走つてゐるわけではない。周りの景色を楽しみながらゆっくり走つてゐる。そうした目で見れば親子のキャッチボールも山なりで、ボールの速度がゆっくり見えてくるし、遊歩道を歩いている人たちも景色を見ながら、

あるいは連れと会話をしながらゆっくり歩いてくる。

一方で平日の僕たちは田代めからすでに急いでいる。朝の支度から始まって駅のホームや仕事の準備など会社の始業時間にとにかく間に合ひように知らずと駆け足になってしまっている。電車なんてすぐに次がやってくるのに、それを待つ余裕さえ持てずに多くの人が駆け込んで車内アナウンスで注意を受けている。

そんなに急いで何が変わるというのか。無理をして急ぐからストレスになるのであって、この公園にいる人たちのようにゆっくり過ごしてみれば心に余裕が生まれ、それが仕事の進め方に良い影響を与えてくれるかもしれない。それが昨日とは違った今日となり、その積み重ねがいつか目の前のこの幸せな光景になっていくのではないか。すべてはつながっているのである。その第一歩が「ゆっくり歩いてみる」こと。今より少しでいいから速度を落として歩いてみれば見える景色もきっと変わってくれるはず。

## 第 1 話 幸せな人たちの共通点（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守ってください。

## 第2話 娘の誘いを断るほとひだりなものの

「ぱぱー、ぱぱー」

声のした方へ目を向けると、一人娘の千也香だった。小さな体で走ってきたせいか息を切らせていく。それでもよほど僕に伝えたいことがあつたのだろう、切らせた息を飲み込みながら口にした。

「ま、まの、かわりに、ぱとみんとん、してくれる?」

千也香の走ってきた先で妻の真紗子が手を振っていた。

「ああ・・・・」

思わず言葉が漏れてしまった。これまで周りのことばかり見ていたけど僕と千也香、そして真紗子は今、一直線上にいた。何だ、ここにも幸せがあるじゃないか。

恋人や友達、そして家族。そのつながりは通常目に見えない。一緒にいるからつながっているかといえばそんなことはない。同じ屋根の下で暮らしているのに言葉を交わさない親子や夫婦がどれだけいるだろう。作り笑いをして恋人や友達の「ふり」をしている人たちがどれだけいるだろう。しかし、そのつながりが見えたときには特別なものを感じ、そして安心する。僕にはそのつながりが今、見えた。

「ぱぱー?」

千也香は僕の返事を待っていた。さっきまでの息切れはすでになくなっていた。

「パパはもう少しここにいたいから、これでママと一緒にジュースでも買っておいで」。

財布から一人分のジュース代を取り出して千也香に渡すと、肩を落としながら真紗子の元へ戻つて行く。

「千也香、ごめんな。この埋め合わせは必ずするから」

この公園で何がしたいのか？この問いは一人娘のお願いを断るほど大事なものなのだろうか。どうも調子が狂う。幸せや家族について改まつて考えたことなどこれまでなかつたに。それもこれもすべては「あのメール」を見つけてしまつたからだつた。

## 第2話 娘の誘いを断るほど大事なもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守ってください。

## 第3話 結婚の決め手となつたもの

昨晩、連絡が途絶えて何年も経つ前の会社の同僚からメールが届いた。あまりに突然の出来事で田を疑つた。中村つて「あの中村」だよな？

中村は前の会社でトップ営業マンだった。成績はいつも上位で、全国の支店間でもたびたび入賞を果たして表彰されることもあった。それだけでなく男の僕から見ても男前で、性格もいい。誰に対しても公平で、分け隔てなく接することができる。中村の周りにはいつも人が集まっていた。

完全無欠に見えるそんな中村にも、唯一といえる欠点があった。女性と会話ができるのだ。もちろん仕事上のことであればいくらでもできるが、プライベートとなるとトップ営業マンの話術は微塵も発揮されない。

中村がフられた日、朝まで励ましたことがあった。フられる理由はいつも同じ。「あなたは何も話してくれない」「電話やメールをするのはいつも彼女からで、中村からはほとんどしない。どうして連絡してあげないと聞いてみると、話すことがないと呟く。

「女は話を聞いてもらいたい生き物だろ？なのになぜオレが話さなければいけないんだ」

酒が入った中村は饒舌だった。僕は聞き役に徹した。

「電話をかけてきたって何も話さないんだぜ？あなたの声が聞きたいのか言って。用がないならメールでいいとは思わないか？」

「何だつていいんじゃないか？お前の仕事の話でもすれば喜んで聞いてくれると思うよ」

「そんなのでいいのか？女ってソムリエみたいな、『貴婦人のような』とか比喩を使った愛の言葉をさらやいてもらいたいんじゃないのか？」

中村が女性と会話ができない理由がわかつた。女性を難しく考えすぎているのだ。僭越ながら僕は中村にアドバイスをさせてもらつた。

「お前が良く使つ『相手を褒める技術』を彼女に使つてあげれば、きっと喜んでくれると思うよ」

今度は中村が聞き役に徹して、時折メモを取りながらの恋愛レクチャーが朝まで続いた。

この件があつて中村とは仲良くなつたが、僕が転職して次の会社へ移つてしまつたため疎遠になつてしまつた。

中村から久しぶりに届いたメールの内容は、

「今彼女にプロポーズした。OKの返事をもらつた。すべてお前に教えてもらつたとおりだつた。心から礼を言つよ。ありがと」

僕に教えてもらつたとおりと書いてある。何のことだ？僕は中村に何を教えたのだろう。

近況報告を兼ねて聞きたいことは山ほどあつたが、親友のお祝いに水を差したくはない。手短にメールを返した。

「おめでとう。早くやった。それで結婚の決め手は？」

中村からすぐメールが返ってきた。

「お前の『言だよ

### 第3話 結婚の決め手となつたもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守つてください。

## 第4話 おはよー

僕の一言？ますますわからない。その答えを求めてメールを送ったが返事は返つてこなかつた。再度メールすることも考えたがまだ彼女と一緒にいるかもしれない。答えが届くまでの間、中村に言つたとされる「僕の一言」をやたらと思い出してみよつと思つた。

当時の中村とのメールのやりとりがまだフォルダに残つていた。  
たとえば九月十四日、

「付き合つて三ヶ月持たずにフラれた。やっぱり話してくれない  
からだと。今回はオレ、がんばったのに」

十月十一日、「取引先の女の子が気になつていて。何て声をかけ  
たらい？」

十月二十八日、「何とかデートにこきつけた。ビニに誘つたらい  
い？」

当時の思い出がよみがえつてくる。中村は自分の欠点を知つてい  
た。それができないことでもがき、苦しんでもそこから逃げなかつ  
た。僕にメールを送りアドバイスを求めることで自分の欠点に立ち  
向かつていつたのだ。

僕も面倒くさがらずにその都度アドバイスをした。それは友達と  
いうこともあるが、僕自身も同じような経験があつたからだ。そう。  
恋愛の師匠と呼べる人に僕も中村と同じようなことをした。だから  
決して他人とは思えなかつたのだ。

それにしても女性が苦手だったあの中村がいよいよ結婚か……。  
人は成長するものだと感慨深かつた。

成長は決して一人でできるものではない。成長の陰には必ず自分を押し上げてくれる人の存在がある。僕が真紗子と結婚したのもひとえに師匠のおかげだ。

「あれ……？」

僕の一言つてもしかして真紗子との結婚に関係あるのか？何だけ？

中村から返信はまだこない。「僕の一言」が頭から離れなくなり、次のフォルダに答えを求めた。ここには中村以外にもたくさんメールが入っていた。ご丁寧に「有明だよ」というメールまで残っている。メールアドレスを見ても、その内容もまったく記憶にない。

このメールをなぜ削除しなかったのかまったくの謎だ。他にも中村とは関係のない、そうした類のメールが多くなった。件数も多いし、別のフォルダを開こうとしたそのときだつた。

「おはよう」

目が釘付けになつた。そんなはずはない。彼女からのメールはすべて削除したはずだ。

「あつー」

なんと、保護されていた。しかもこのメールだけ別のフォルダに振り分けられていたので、削除したつもりができていなかつた。日

付は？「十一月二十九日」。間違いない、彼女から最後のメールが届いた日だ。

「思い出したぞ、僕が中村に言つた一言を

思わず叫んだ。叫ばずにはいられなかつた。中村だけではない。僕が真紗子と結婚できたのも、そしてあの失恋を乗り越えられたのも、すべて彼女が教えてくれた「一言」のおかげだった。

## 第4話 おはよひる（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かい目で見守ってください。

## 第 5 話 別れた理由が知りたくて

「今夜から明日朝にかけて厳しい冷え込みになりそうです」

テレビから流れる天気予報にも上の空だった。

一応、留守電にはメッセージを入れておいたけど、電話がかかってくることはないだろう。あの日を最後に洋子は電話に出てくれない。一体どうしてこうなってしまったのか。

僕が悪いのはわかっている。「別れましょ」と言われてもそれを受け入れられず、「電話しないで」と言われても電話してしまう。どうしてこうなったのか、その理由がわからないかぎり自分を止めることができなかつた。なぜここまで嫌われなければいけないのか。好きという気持ちも消えてしまつものなのか。

友達にも相談した。彼らの答えは皆同じだった。「あきらめたほうがいい」。

でも、誰に何を言われようが洋子は戻つてくれると信じていた。なぜなら僕たちは「運命の人」だから。

運命の人とはいっても偶然が重なり合う人のこと。そうでなければこのすれ違う世の中はどうして男女が出会い、恋をすることができるだろう。たとえば僕たちにはこんな偶然があつた。メール送信と同時に電話がかかってきたのである。メールを送つた側はこのときどう思つだろうか。

僕は洋子の声が聴きたくて家の電話から電話したことがあった。

そしたら洋子は不思議そうに聞いてくる。

「もうメール届いたの？」

僕はメールが苦手で、その返事を電話で応えることが習慣になつていたために洋子はそう聞いたのだろう。しかしメールは届いておらず、洋子がこのとき何を言つているのかわからなかつたので聞いてみた。

「そのメールに何て書いたの？」。

洋子がメールの内容を話しうつとしたそのときだつた。机の上に置いてある携帯電話が鳴り出して、画面を見てみると「新着メール」と表示されていた。

「もしかして、今届いた」のメールのことかと聞いてるの？」。

そう尋ねると、受話器越しに洋子の異変が伝わってきた。

「ねえ、聞こてる？」

「大好き」

「いや、もうじゃなくて・・・」

「大好き」

「だから、違つて・・・」

「大好き」

「じゃあ、ゴキブリも？」

「それは嫌い、でも大好き」

「」の偶然がよほどうれしかつたのだろう。僕のいじわるを除いて

洋子は何を聞いても「大好き」としか言わなかつた。何度も何度も、心に溢れる感情をすくい出し、それをそのまま僕に届けてくれたのだ。

洋子が僕の誕生日を祝つてくれたときもそつだつた。それまでの楽しい会話から一転、洋子は突然黙り込み、うつむいてしまつた。

「どうしたのだろう?..」

僕は事態の状況を飲み込めなかつた。何か失礼なことを言つてしまつたのだろうか。しかし、そうでないことは洋子の次の一言ですぐにわかつた。黙り込んだのではなく、それを言おうかどうじょうかためらつていたのだ。

「実は、前の彼と別れた日が今日なの」

洋子が自分から過去の男の話をしたのは初めてだつた。この日のために用意した、洋子なりのサプライズなかもしれない。

別れは出会いの始まりだと言つ。たしかに第三者的にはそうかもしないが、当事者にとつてその実感を得るのはもう少し先である。別れた悲しみを乗り越えて、その出会いに気づくまではどうしたつて時間がかかる。しかし、それが具体的な形となつて表れたとしたらどうか。たとえば前の彼と別れた日が、次に好きになつた人の誕生日だとしたら? これ以上の「別れは出会いの始まり」を表すものが他にあるだろうか。

## 第 5 話 別れた理由が知りたくて（後書き）

いつも感想をありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かい目で見守ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5839y/>

大事なことはすべて失恋から学んだ

2011年11月24日12時56分発行